

◆李陵

朔風は戎井を吹いて寒く、いかにも万里孤軍来たるの感が深い。

~~~~~

朔風（さくふう） 《「朔」は北の方角の意》北から吹く風。北風

戎井（じゅうい） 戦（いくさ）の場に着て出る衣服。

輜重（しちょう）は、軍隊で、前線に輸送、補給するべき兵糧、被服、武器、弾薬などの軍需品の総称のこと。

庸主（ようしゅ） 凡庸な君主。庸君。

~~~~~

武帝は李陵に命じてこの軍旅の輜重のことに当たらせようとした。

武帝は決して庸主ではなかったが、…

人馬入り乱れての搏兵戦（はくへいせん）である。

~~~~~

搏戦（ハクセン） = はく - とう【×搏闘】[名]（スル）殴り合ってたたかうこと。組み打ちすること

白兵戦（はくへいせん、英: close combat）は、刀剣などの近接戦闘用の武器を用いた戦闘のこと。

~~~~~

前主の是

とするところ、これが律となり、後主の是とするところこれが令となる。当時の君主の意のはかに何の法があろうぞと。群臣皆この廷尉の類であった。丞相公孫賀、御史大夫（ぎよしたいふ）杜周（としゅう）以下、誰一人として、帝の震怒を犯してまで陵のために弁じようとする者はない。

~~~~~

閹人（えんじん） 「宦官（かんばん）」に同じ。

疾痛惨怛（しつつかんたん） ひどく悩み、心配すること。「疾痛」と「惨憺」はどちらも心を痛めるという意味。

畢生（ひっせい） 《「一の」の形で》 生を終える時までの間。終生。一生。 「一の仕事」

怡（たの）しい

い【×怡】 心がなごむ。打ちとけて喜び楽しむ。「怡怡・怡悦・怡然」

い - えつ【×怡悦】 [名] (スル)喜び楽しむこと。

寇掠 (こうりやく) [名] (スル)他国に攻め入って、財貨などを奪い取ること。

攻略 《名・ス他》敵陣や敵地を攻め取ること。転じて、相手を打ち負かすこと。

~~~~~

運命と意地の張合いをしているような蘇武の姿

が、しかし、李陵には滑稽や笑止には見えなかった。想像を絶した困苦、欠乏、酷寒、孤独をしかもこれから死に至るまでの長い間、平然と笑殺して行かせるものが、意地だとすれば、この意地こそはまことに凄まじくも壮大なものと言わねばならぬ。昔の多少は大人気(おとなげ)なくも見えた蘇武の痩せ我慢が、かかる大我慢にまで成長しているのを見て李陵は驚嘆した。しかもこの男は自分の行いが漢にまで知られることを予期していない。自分が再び漢に迎えられることはもとより、自分がかかる無人の地で困苦と戦いつつあることを漢はおろか匈奴の单于(せんう)にさえ伝えてくれる人間の出てくることをも期待していなかった。誰にもみとられずに独り死んで行くに違いないその最後の日に、自ら顧みて最後まで運命を笑殺し得たことに満足して死んで行こうというのだ。誰一人己(おの)が事跡(じせき)を知ってくれなくとも差支(さしつか)えないというのである。

誰一人己が事績(なしたげた仕事。事業と功績。)を知ってくれなくとも差支(さしつか)えない。

#### ◆悟浄出世

昏昏昧々紛々若々 (こんこんまいまいふんぶんじゃくじゃく)

昏昏 1. 意識がないさま。深い眠りにについているさま。 2. 暗くて物がはっきり区別できないさま。

昧々

紛々

若々

蒲衣子の次に、渠(かれ)は斑衣鰍婆(はんいけつば)の所へ行った。既に五百余歳を経ている女怪だったが、肌のしなやかさは少しも処女と異なる所がなく、婀娜(あだ)たるその姿態は能く鉄石の心をも蕩(とろ)かすといわれていた。肉の楽しみを極めることを以て唯一の生活信条としていたこの老女怪は、後庭に房(ぼう)を連ねること数十、容姿端正な若者を集めて、この中に盈(み)たし、その楽しみに耽(ふ)けるに方(あた)つては、親昵(しんじつ)をも屏(しりぞ)け、交遊をも絶ち、後庭に隠れて、昼を以て夜に継ぎ、三月に一度しか外に顔を出さないのである。

百千万億恒河沙劫無限 (ごうがしゃこうむげん)

~~~~~

恒河沙 恒河沙 (ごうがしゃ) は漢字文化圏における数の単位の一つ。恒河沙がいくつを示すかは時代や地域により異なり、また、現在でも人により解釈が分かれる。一般的には  $10^{52}$  を指すが、 $10^{56}$  とする人もいる。恒河沙はもとは仏教用語である。

~~~~~

#### ◆悟浄歎異

如来が笑いながら言う。「大層威張っているようだが、一体、お前は如何なる道を修し得たというのか？」悟空曰く「東勝神州傲来国華巢山(とうしょうしんしゅうどうらいこくかかざん)に石卵より生れたるこの俺の力を知らぬとは、さてさて愚かな奴。俺は既に不老長生の法を修し畢(おわり)、雲に乗り風に御(ぎょ)し一瞬に十万八千里を行く者だ。」如来の曰く、「大きなことを言うものではない。十万八千里はおろか、我が掌(て)に上って、さて、その外へ飛出すことすら出来まいに。」「何を！」と腹を立てた悟空は、いきなり如来の掌の上に跳(おど)り上った。「俺は通力によって八万里を飛行するのに、儼(なんじ)の掌の外に飛出せまいとは何事だ！」言いも終らず舂斗雲(きんとうん)に打乗ってたちまち二、三十万里も来たかと思われる頃、赤く大いなる五本の柱を見た。渠(かれ)はこの柱の許に立寄り、真中の一本に、斉天大聖到此一遊(ここにいたりいちゆうす)と墨くろぐろと書きしるした。さて再び雲に乗って如来の掌に飛帰り、得々(とくとく)として言った。「掌どころか、既に三十万里の遠くに飛行(ひぎょう)して、柱にしるしを留めて来たぞ!」「愚かな山猿よ!」と如来は笑った。「汝の通力がそもそも何事を成し得るというのか? 汝は先刻から我が掌の内を往返したに過ぎぬではないか。嘘と思わば、この指を見るがよい。」悟空が異(あや)しんで、よくよく見れば、如来の右手の中指に未だ墨痕(ぼつこん)も新しく斉天大聖到此一遊と己(おのれ)の筆跡で書き付けてある。「これは?」と驚いて振仰ぐ如来の顔から、今までの微笑が消えた。

#### ◆中島敦伝

中島敦は明治四十二年(一九〇九)に生まれ、昭和十七年(一九四二)になくなった。

せんそく

三十三年の生涯だった。死因は宿痾(しゅくあ)の喘息(ぜんそく)である。当時彼は八年間にわたる教師生活、そして、つい一年ほどまえからはじめた南洋庁の役人生活にみずから終止符をうち、作家として立つ決意をかためた矢先だった。

15歳 第三母、飯尾コウを迎える。

19歳 このころよりすでに喘息の発作があったといわれている。

28 歳 長女正子生まれて三日目に死ぬ。

33 歳 世田谷区の岡田病院に入院する。12 月 4 日、宿痾喘息のため同医院にて死去。玉墓地に葬られる。

◆弟子

~~~~~

諫臣（かんしん） - 主君に諫言(かんげん)する家臣。

かんしん【奸臣／姦臣】とは。意味や解説、類語。邪悪な心を持った家来。

~~~~~